

2 言語同時習得バイリンガル児の語彙獲得傾向分析

一日馬バイリンガル児ケーススタディを中心に

堀尾 佳以(宇都宮大学)

1. はじめに

本発表では日本語とマレー語のバイリンガル児が「どのように2つの言語を習得するのか」、その過程についてケーススタディによる分析で明らかになった点を発表する。

2. 研究の目的

まず、本研究と関連する先行研究をまとめ、その課題を検討した上で目的を記す。

2.1 関連先行研究

2言語同時習得に関する先行研究では、李(2011)が日本語韓国語バイリンガル児の語彙獲得過程を記録し、言語環境の影響による優勢言語の変遷があると指摘した。許(2000)は日本在住中国人乳児の中国語語彙の産出が遅れたのは言語入力環境的要因によるとした。福嶋(1992)は1歳5ヶ月からアメリカに滞在した日本人乳幼児に言語習得をうながすインプットにより優位言語の転換が起こったと分析した。

2.2 研究の目的

1.1 で挙げた先行研究のように、表出語彙をメモして記録し1言語の乳幼児と比較するものや、日-英、日-中、日-韓のケーススタディはあるが、日本語-マレー語（以下、日-馬）の研究は見当たらなかった。また、これまでは「2言語同時習得」か「乳幼児の語彙獲得」のどちらかに焦点を当てたものが主であったが、この2つの研究分野を融合させる必要があると考えた。

そこで本研究では、日-馬バイリンガル児がどのように2つの言語を習得するのか、マレー語による影響や語彙獲得傾向について明らかにすることを目的とし、2言語同時習得と語彙獲得の両方をあわせて考察する。日-馬バイリンガル児（4歳・2歳）2名（以下、A1, A2）の2言語同時習得過程を記録・分析し、比較検証のため日本人乳幼児（5歳・0歳）2名を対象としてケーススタディを行う。

3. 研究方法

3.1 研究対象者と研究方法

研究対象者はA1, A2の2名および比較対象としての日本人乳幼児（5歳・1歳）である。なお本稿で挙げる例ではそれぞれが発話した時期も記録する。

研究方法は、絵本場面と自由遊び場面の2場面を設定し、乳幼児と保育者の自然談話を収録・文字化して分析を行う。また、保育者による語彙出現メモを記録として採用する。収集したデータの出現語彙や文法的な特徴を分析し、調査後に保育者へのフォローアップ・インタビューも実施する。その他に、日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙による語彙獲得状況について調査を実施した。

3.2 ケーススタディについて

本研究ではケーススタディを中心に分析を進めているが、サンプル数の少なさや個人的な傾向だという批判もあるだろう。しかし、ケーススタディとは「数少ないケースを徹底的に分析することで、そのケースを説明

する論理を確立する（田中 2011:185）」ものであり、本研究の観察対象乳幼児は日々、語彙を獲得していく傾向を詳細に観察・記録しており、1つのケースとして示せると考える。

3.3 比較対象としての日本人乳幼児について

小椋ほか(2016:46)では日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙による調査で、家庭で養育されている25ヶ月児48名、保育所で養育されている25ヶ月児171名の「語と文法」版のデータを収集しており、平均値や日本の子供の標準的な言語発達について詳しくまとめられている。ただ、実際に同時期・同じ保育園で過ごしていたA1(4歳)と日本人幼児(5歳)の間にどの程度の差が見られるのか観察したいと考え調査を依頼した。また日本人乳児(1歳)はA2と1学年違うものの今後の語彙習得研究に繋がると考え、協力をお願いしたものである。

4. 研究結果

現在の録音資料およびメモによる調査から、日-馬バイリンガル児の「混用」と「言語間干渉」「方言による語彙獲得」が観察され、特に語彙の習得や文法形成について特徴が見られた。他言語のバイリンガル児については動詞優位/名詞優位に関する議論があるが、日-馬バイリンガル児は2021年12月時点では名詞優位であった。録音資料および語彙出現メモに記録された日-馬バイリンガル児A2(1歳7ヶ月から2歳3ヶ月まで)のデータをまとめたものが図1である。

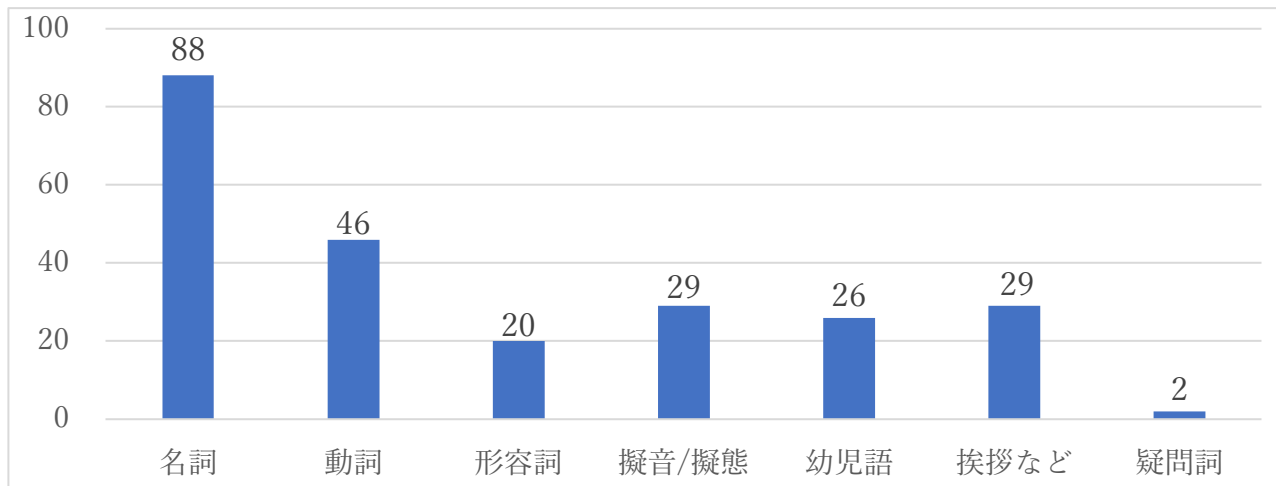


図1. 日-馬バイリンガル児A2の日本語：発出語彙分類(2歳3ヶ月:2021年12月)

では具体的な内容について例を挙げながら見ていこう。

4.1 混用

本研究の被験者である日-馬バイリンガル児は、優勢言語が日本語である。ここで挙げた例では、一部の語彙がマレー語になった「混用」が見られる。

例1： 水, tak doh (タッドッ)	水, ない	A2 2021. 8. 15
例2： ○○君, mandi (マンディ) 終わった.	○○君, シャワー終わった.	A2 2021. 9. 22
例3： 今, make (マケ) 中 (ちゅう).	今, 食べているところ	A1 2021. 6
→今, 食べ中 (ちゅう)		A1 2021. 9
→今, 食べてる		A1 2021. 12

なお例3のように、時間の経過とともに混用から全て日本語の文へと変化したものもあった。

4.2 言語間干渉

次に、言語間干渉についてであるが、李(2011) 日-韓バイリンガル児に見られた日本語の助詞や動詞の過去形による影響はまだ観察できていない。日-馬バイリンガル児2名に見られた言語間干渉はマレー語の語順による「修飾語の倒置」である。

例4 : 誤 → ニュースの何, 見てた? A1. 2021. 9. 18

正 → 何のニュース, 見てた?

例5 : 誤 → サンドイッチのエビフライ, 食べたい. A1. 2021. 12. 29

正 → エビフライのサンドイッチ, 食べたい.

例6 : 誤 → ブーブの i jah (イジャ) A2. 2021. 12. 29

正 → i jah (イジャ) のブーブ 意味: 緑色の車

例4では、日本語の発話であるものの修飾語と被修飾語の位置がマレー語の語順になっており、文法的な「干渉」が見られる。これはマレー語の語順による影響で、マレー語では語彙の修飾をする際、修飾される名詞(=被修飾語)が前置され、修飾語である形容詞が後ろにつく。

同じく例5も語彙がマレー語の語順になっている。例6については、文法的な干渉による語順の倒置が見られるだけでなく、混用・幼児語といった特徴が混在している。

4.3 方言による語彙獲得

もう一つ、特徴的な傾向として「マレー語の方言による語彙獲得」が挙げられる。

日-馬バイリンガル児であるA1とA2が学んでいるマレー語にも、地域によって方言が存在する。主なものはクランタン方言、トレンガヌ方言、サバ方言、サラワク方言など10方言あり、中でもウタラ方言は4つに細分化されている。観察対象A1, A2ともにクランタン方言で獲得しているが、これはA1とA2の父の母語がマレー語のクランタン方言であることによるものである。

本研究で対象となるクランタン方言は他の地域の人が聞いてもわからないと言うほど、共通語と異なる点が多々ある。そこで、まずはクランタン方言について主な特徴を簡単にまとめる。

クランタン方言の特徴

母音の変化	① 語尾-an /-ang → e	例) makan 食べる → make マケ
		ikan 魚 → ike イケ
		Kelantan クランタン → Kelate クラテ
	② 語尾- a → o	例) apa 何 → gapo ガポ
		mana どこ → mano マノ
子音	r の発音 → g に近い	例) Goren 焼く → Gogen ゴゲン
		Merah 赤 → Mego メゴ

では、実際にどの程度の語彙を獲得し、そのうちクランタン方言が占める割合はどのくらいなのだろうか。今回は東京外国語大学言語モジュールのマレー語にある分類語彙表検索¹を参考に語彙リストを作成し、A1の語彙獲得傾向について分析を行なった。

次の表1はA1が獲得したマレー語とクランタン方言の割合を品詞分類によって分けたものである。品詞別に獲得した数と、そのうちどの程度の語彙を方言で獲得しているのかを数値で示した。

¹ http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/ms/vmod/v_bunrui.php

² マレー語にも接続詞や感動詞、助詞が存在しているがA1は未獲得のため、表には掲載していない。

表1. 日-馬バイリンガル児 A1 (4歳8ヶ月) の獲得したマレー語 (方言) 品詞分類

品詞	獲得語彙数	方言による獲得	主な例
動詞	42	28 (66.7%)	make, mandi, gi, bacho
名詞	99	61 (61.6%)	nenek, keto, jambatte, sopo
形容詞	42	24 (57.1%)	sedap, tak doh, banyok
数詞	20	20 (100%)	so duo, tiga, empat, limo, ene
疑問詞	3	3 (100%)	gapo, mano, sapoh
擬音語・擬態語	2	2 (100%)	goyang goyang, golek golek

父親の母語がクランタン方言であり、動画通話などで日常的に接するマレーシアの親戚もクランタン方言話者であること、また他のマレーシア人と接する機会が少ないことなどから A1 も A2 も方言とは認識せず獲得していると考えられる。

4.4 日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙

以上の結果をふまえ、これから発表までに日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙(JCDIs)の指標により幼児の語彙獲得について測定・把握する。その際、1言語の乳幼児と日-馬バイリンガル児の数値比較をすることで、バイリンガル児は優勢言語(日本語)の語彙は豊富だが、同年齢の幼児と比較して2言語とも獲得語彙数が少ない可能性についても検討する。現在、A1, A2 の2名および日本人乳幼児(5歳・1歳)2名、合計4名分の調査を実施・分析中である。

5. 結論

5.1 本文中での参考文献の引用

同時バイリンガル児のミキシングのデータから Genesee(1989)が分類した7つのミキシングを久津木(2006)がまとめている。これを参考にすると、「混用」は2)語彙レベルでのミキシングであり、「言語間干渉」は4)の統語(語順)レベルでのミキシングと言える。

本研究で挙げた「混用」は語彙不足を補うための借用であり、「言語間干渉」については、久津木(2006)の示した「2言語が同時に獲得された結果による2言語知識の共有そして相互作用によっておこる現象」であることを裏付けるものである。

今後も語彙獲得過程を継続して観察し、日-馬バイリンガル児の2言語同時習得についてその過程と特徴について解明していきたい。

謝辞 本研究は宇都宮大学工学部若手萌芽的研究助成を受けたものである。調査協力者の方々に深謝する。

参考文献

- 小椋 たみ子(2007). 日本の子どもの初期の語彙発達 言語研究 132, pp. 29- 53
 小椋 たみ子・綿巻徹・稲葉太一(2016). 日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の開発と研究 ナカニシヤ出版
 田中 浩 (2011). ケーススタディリサーチの本質について 松本大学研究紀要9号, pp. 179 - 186
 福嶋 秩子(1992). 2言語同時習得の過程とインプット 県立新潟女子短期大学研究紀要第29集, pp. 21-27
 許 佳美(2000). 子どもの2言語同時習得における言語的認知要因と環境要因の検討 京都大学大学院教育学研究科紀要 46号, pp. 84-95
 李 善雅(2011). 同時バイリンガル幼児の言語習得過程に見られる二つの言語の「混合」と「干渉」 社会言語科学 第13巻第2号, pp. 88- 96
 東京外国語大学言語モジュール：マレー語：<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/ms/>